

ムハンマド・ブン・マフムード・トゥースィー著『被造物の驚異と万物の珍奇』(3)

守川 知子\* 監訳

ペルシア語百科全書研究会\*\* 訳注

(p.71) 第2部：天と地の間で生じる驚異について

【第1章 火の驚異について】

至高なるアッラーのいわく、「あなたがたは、灯火に就いて考えたか。その(燃やす)木を、あなたがたが創ったのか、それともわれが創ったのか」[Q56: 71-72]。この章句の意味は、「創造主は人々に恩恵を施される」ということである。すなわち、[ペルシア語では]「われこそが木の中に火というものを創造した。それを生み出したのはおまえたちか、それともわれか。またわれは火の中にさまざまな益を創り出した。よそ者であれ同郷の者であれ、その者の役に立つように」[である]。誰もそれなくしては生きられない。

知れ。私は火の中にさまざまな有益さがあることを認める。火にはあまりにも多くの有益さが備えられているために、ヒンドやギリシアの知性ある者たちは誤って火を拝んだ。そのような迷妄はマジたちの間に残り、彼らは火を崇拝した。その後、[イスラームの教えがもたらされたことにより、]導きは創造主がお与えになるものであり、知性だけでは事は成就しないということが明らかとなった。火をその有益さゆえに崇拝するならば、土にはそれよりも多くの有益さがあり、水にもまた、火よりも多くの有益さがある。創造主がある集団を惑わせようとされるとき、彼らを何かの虜にさせる。たとえばヒンドの人々を牛崇拝の虜にさせ、キリスト教徒をイーサーのロバの蹄を拝むことに、また多神教徒を偶像や無生物を拝むことに囚われさせたように。

さて、火の性質と特性について述べよう。

【火について】

知れ。火(ātas)は世界中に遍在する。いかなる石や木も火を含まないことはない。もし、無知な者が1本の棒を取り上げ、「火はどこにあるのか」と言うならば、私は、「何であれ、ものを取り出す方法は(p.72)明らかだ」と答えよう。

たとえば2本の木を、火つけ板と火おこし棒(marḥ wa 'afār)としてこすり合わせると、火が起る。あるいは石を鉄の上で叩いてもよい。火を松の枝に近づけると、熱がそれに達し、タールやピッチがそこから流れ出す。またミルクをかき混ぜるとそこから油脂が生じる。金と銀をそれぞれに分け離したいならば、揺すったり叩いたりしても離れない。その分離法は製錬工が知っているよう。

ハチの腹の中にある蜂蜜のように、火はいろいろなものの中に隠れている。たとえ1000匹のハチを殺しても、それらの腹の中に蜂蜜は見当たらず、1000本のナツメヤシの木を割ったとしても、ナツメヤシ[の実]は見つからない。同様に、火は無生物の中に隠れている。創造主はそれを何らかの方法で明らかにされるのである。

\* 北海道大学大学院文学研究科准教授

\*\* 本研究会については、『イスラーム世界研究』第2巻2号(198-204頁)の監訳者による「解題」を参照のこと。

知れ。世界には創造主——至大なれ、崇高なれ——が創造したもののなかで火よりも良いものはない。その形は自由で、[何ものにも]とらわれず、混じり合うことはないが、貪欲で、御し難い。それをつかんだり握ったりする力を誰にも与えることはなく、誰かに従うこともない。[火は]天界のものであるが、無理にこの世界にもたらされた。創造主は、しもべたちの益となるよう火を無生物の中に閉じ込められた。[火は]触れたものを無きものとし、解き放たれるや、天のもとした場所（markaz）へ向かおうとする。火のもとの場所は天界のあらゆるものよりも上にある。なぜなら、水は土よりも上にあり、空気は水よりも上にあり、火は空気よりも上にあるからである。

また火の中には大いなる恐怖と勝利がある。鍛冶屋の炉の中にある大きな火に、少しばかりの水が注がれるだけで、身の毛もよだつ恐ろしい音がわき上がることは知っている。「わずかひとかけらで町を滅ぼすものは何か」と尋ねられたら、「ひとかけらで世界を燃やしてしまう火である」と答えるがよい。

知れ。すべての動物は火を好む。人が驚異を目のあたりにしたいと思うなら、夜、荒野で火を灯して待つとよい。そうすれば火を見にやってくるさまざまな動物たちを目にするだろう。同じように、ランプを（p.73）子供の前に置き、その子に優しく話しかけると、子供は心に喜びを感じ、舌もほぐれる。たとえば見えない苦しみが子供にあり、泣きわめいたり、乳を飲まなかったり、夜、寝つかなくなったりすることがあろう。[そのようなときに]母親があかりを灯せば、[子供は]安心して静かになる。漁師が夜、舟に乗りこみ、ガラスの中に灯火を入れて舟の縁に置く。するとさまざまな水鳥がやってきて、そのランプを見つめる。漁師が棒を手にとり盥を叩くと、海の生きものたちは静かになり、ランプをじっと見ている。そこで漁師は〔鉤型の〕鉄棒を持ち、それら〔魚〕を自分のところへ引き寄せ、舟がいっぱいになるまで小舟の中に投げ入れる。

知れ。火の有益さは明らかである。もし人が焼かれていない練り粉のパンを食べたら、胃が悪くなる。あるいは生肉を食べても何ら喜びを感じないが、火の熱が通ると、おいしそうな匂いがして食欲がそそられる。創造主はこのような恩寵を、王であろうと貧者であろうと、惜しむことなく与えられた。一方、誰にも〔火を〕宝蔵にしまい込むほどの力はない。人が家の中にいて、夜が訪れると、何も見えないほどの暗闇が生じる。月（mah）を魚（māhi）と区別できず、羊を狼と見分けられないほどである。[だが]あかりを1つ灯せば、そのような〔暗黒の〕夜から〔明るい〕昼が生まれ、心やすさが生じる。これは、しもべたちのためになされた創造主の公正さによるものであり、乞食もアミールもそこでは等しく〔その恩寵に与れる〕。

#### <マギたちの不幸と、拜火教徒について>

知れ。火を拜む者たち（ātaš-parastān）の不幸は、創造主が定められたことである。知るがよい。この世界にある信仰の中で火を拜む信仰ほど不吉なものはない。それゆえ、いかなる共同体（millat）からもマギになる者はいなかった。

[逸話]

ウバイドゥッラー・ブン・ズィヤード<sup>1)</sup>は次のように言っている。イーサー——彼に平安あれ——

1) テキストは「アブドゥッラー」だが、サーデギー本に従う。

が生まれたとき、アジャムの国の帝王アルダシール (Ardašīr)<sup>2)</sup> は、(p.74) 稲妻が走り、星が彼を焼き尽くすのを見た。アルダシールは恐れ、イーサーの生誕ゆえだと知った。彼はいくらかの蜂蜜を3人の者に持たせ、イーサーのもとに送った。イーサーは3粒の丸薬をアルダシールに送った。

使者たちは言った。「この丸薬には何か効き目があるのだろう。」

2人はその丸薬を飲んだが、1人は自分の丸薬を隠した。そして彼らはアルダシールのもとに戻った。

[アルダシールは] 言った。「おまえたちに [イーサーは] 何をくれたのか?」

2人の者は言った。「何もくれませんでした。」

3人目が言った。「はい。私は自分がもらった丸薬をこれこれの場所に埋めてきました。」

[アルダシールは] 言った。「行って、取ってこい。」

王は彼と一緒にその場所に行った。彼らは探したが、[何も] 見つけられなかった。地面を掘ってみると、そこから大きな炎があがり、王に向かってきた。王は [身を伏せようとして] 跪いた。難を逃れたので、彼らはそのときから火を崇拜し始めたのである。

言われているところによると、火を崇拜する理由は次のとおりである。

ホルムズ・ブン・ホスロウ・シーリーン・バフラーム (Hurmuz b. Ḥusraw Šīrīn Bahrām)<sup>3)</sup> は、「祝福された子供がイェルサレム (Bayt al-quḍḥ) で生まれるだろう」と [書物で] 読んでいた。[ホルムズは] オリブ油と黄金と乳香を贈り物としてマルヤムに送った。マルヤムはホルムズに、土の入った革袋を送った。彼はそれを、[現在] シーズ (Šīz) の町がある場所に埋めた。

別の帝王が [そのことを] 知り、人を遣わしてその土の上に建造物を建てようとした。だが [使いの者は] 道に迷い、たどり着くことができなかった。夜になると、大きな光がそこから立ちのぼった。彼はその光のまわりに線を引き、その場所に拝火殿 (bayt al-nār) を建てた。その建物は今でも建っており、そこから東や西へ火が運ばれる。またその上にはドームがつけられ、ドームの上には銀の三日月が据えられた。[そして] 誰もそこからそれを取り去ることができないよう、まじないがかけられた<sup>4)</sup>。その火はかの地で600年のあいだ燃え続けていると言われている。

拝火教徒 (gabrān) が崇拜する火は「ジャムシードの火 (ātaš-i Jamšīd)」である。彼らはそれを「栄光の火 (āḡar-i ḥwarra)」<sup>5)</sup> と呼んでいる。それはホラズム (Ḥwārazm) にあった。公正なるヌー

2) サーサーン朝初代君主アルダシール・パーバカーン (在位220年頃-240年) を指す。実際には、イエス・キリストが誕生した紀元前後はアルサケス朝 (パルティア) 時代にあたり、ここでは時系列の錯誤が見られる。イスラーム系の伝承において、アルサケス朝やその王の存在が意識されることはきわめて稀であり、ここでも「拝火」のはじまりは、ゾロアスター教が国教であったサーサーン朝の王に帰されている。

3) このような名をもつ王はサーサーン朝期には見られず、著者あるいは写字生の混乱がある。ミーノヴィー氏の訂正には、「ホルムズ・ブン・ホスロウ・ブン・クバードか」とあり、この場合は、サーサーン朝末期の王、ホルミズド4世 (在位579-590年) にあたる。彼はホスロウ・ヌーシラヴァーンの息子であるが、590年に異母兄弟に謀られ、投獄の上処刑された。彼のあとには、息子のホスロウ2世が継いだ。軍司令官のバフラーム・チュービーーンが反乱を起こしている。

4) アブー・ドゥラフの旅行記に、シーズの町について次のような記述がある。「町には、堂々たる拝火殿 (bayt nār) がある。東方や西方のゾロアスター教徒 (majūs) の火がそこからともされる。その丸屋根のてっぺんには銀の三日月があるが、それは拝火殿のシンボルである。アミール達や征服者達がそれを取り去ろうと試みたができなかった」[イスラーム地理書・旅行記研究会訳注『アブー・ドゥラフ イラン旅行記』京都、1988年、8頁]。また、同書8-9頁には、ホルムズがマリア (マルヤム) のもとへ使いを送ったこと、マリアが土入りの袋を使者に与えたこと、使者がシーズまで来たところで死に、のちにそこに拝火殿が建てられたことが語られている。なお、ここで語られている建物は、「ソロモンの玉座」を意味する「タフテ・スレイマーン (Taḥt-i Sulaymān)」と呼ばれる、イラン西部のザンジャン州にある遺構だとされている。この遺構については、本田實信「ソロモンの台座」[足利惇氏博士喜寿記念オリエント学インド学論集] (国書刊行会、1978年、287-301頁) を参照のこと。

5) 「幸運 (栄光) の火」はゾロアスター教の聖なる火のなかでは最上のものであり、世界の創造時から保管されて

シラヴァーンがカーリヤーン (Kāriyān)<sup>6)</sup>にそれを持ってきたのである。我らの預言者[ムハンマド]の番になると、拝火教徒たちは怖れ慄いた。そしてその[火の]一部をファサー (Fasā)<sup>7)</sup>に運び、もし1つが消えてしまっても、もう1つが残るようにした。

別[の火]は「ゴシュナスブの火 (nār al-Jusnaf)<sup>8)</sup>と呼ばれ、カイ・ホスロウ (Kay Ḥusraw)<sup>9)</sup>がアゼルバイジャンに設置した。公正なるヌーシラヴァーン (p.75)はそれをシーズにもってきた。拝火教徒たちは言う。「ゴシュナスブには1人の天使が任じられており、それを『サバラーン (Sabalān)<sup>10)</sup>』と呼んでいる」と。

カイ・ホスロウはスィヤーヴァシュ (Siyāwas)<sup>11)</sup>の息子で、スィヤーヴァシュは[とても]美しかった。[彼の父の]妻が彼を好きになったが、スィヤーヴァシュは彼女の言いなりにはならなかった。この女は、「スィヤーヴァシュが自分を襲おうとしている」と訴えた。このことで争いが生じた。彼らは火の前に行った。スィヤーヴァシュは裸になり、火の中に入っていった。そして無事に出てきた。人々は、スィヤーヴァシュがそのような誹謗からは無実だと知った。

[ゾロアスターの火について]

別の[火は]「ゾロアスターの火 (ātaš-i Zarādušt)」である。ニーシャープールの地にある。ゾロアスターはマギの首魁で、バルフの出であった。彼は預言者であると主張し、「サバラーンの山で、1人の天使がわたしのところへやってくる」と言った。彼がもたらした災いは[今も]この世に残っている。彼は拝火教徒の教えを説き、多くの人々が彼に従った。

次のように言われている。ゾロアスターは現れた当初、詐術を用いていた。彼はロスタム・ザール (Rustam-i Zāl)<sup>12)</sup>の前に連れて行かれ、驚くべき詐術を行った。ロスタムは彼になにがしかのものを与えた。彼はひとかどの人物になると、預言者であると主張し、火を崇拝することを定めた。王たちは彼に従い、[入信した]。だがロスタム・ザールだけは別で、こう言った。「私は、彼が最初のうち、詐術やまやかしを行っていたのを知っている。彼が預言者だということなど私は信じない。」

[拝火教の害について]

知れ。ユダヤ教をのぞき、拝火教徒の信仰ほど墮落した教えはない。もし、火を拝む理由が[そ

いるとみなされた。伝承では、この火はホラズムからファールスにもたらされ、サーサーン朝期には、司祭のための火と位置づけられた [EIr: Ādur Farnbāg]。

6) ファールスにある小さな町で、拝火殿があり、難攻不落の山城だったと伝えられる [Yāqūt, Mu'jam al-buldān, vol.4, p.429]。

7) ファールス州の1都市。校訂では「ニサー (Nisā)」となっているが、巻末の訂正表等を踏まえ、ファサーの町と考える。

8) “Nār al-Jusnaf”は、ペルシア語の「ゴシュナスブの火 (Āzur Gušnasp)」のアラビア語表記である。「アーザル・ゴシュナスブ」は、ゾロアスター教の最も古い拝火殿の1つとされ、アゼルバイジャン州にあり、戦士のための火と位置づけられた。12世紀ごろまでは火が灯されていたが、その後廃れたようである [EIr: Ādur Gušnasp]。この拝火殿もまた、タフテ・スレイマーンのことと考えられている。

9) イランの神話王朝であるカヤーン朝の第3代王。同朝第2代カイ・カーウスの孫でスィヤーヴァシュの息子。母はアフラーシヤープの娘ファランギース。父スィヤーヴァシュの仇を討つため、ロスタム等の協力を得てトゥーラーンと戦い、アフラーシヤープを殺害した [EF: Kay Khusraw; Siyāwush]。

10) 「サバラーン」は天使の名前としても使われるようだが、通常は以下でも見られるように、イラン西北部のアルダビール近郊にある山(標高4811メートルの火山)を指す。ダマーヴァンドとならび、イスラーム時代の地理書では頻繁に言及される山である。

11) カヤーン朝のカイ・カーウスの息子。父カイ・カーウスとの確執のためアフラーシヤープのもとに避難し厚遇されたが、のちにアフラーシヤープによって殺された [EF: Siyāwush]。

12) ザールの息子ロスタムは、フェルドウスィー著『王の書』の中核となる英雄。

の] 有益さにあるとするなら、水の有益さは火の有益さに劣るものではなく、空気が水に劣ることもない。有益さに鑑み〔崇拜す〕るならば、なぜ彼らは水や空気を崇拜しないのか。

<逸話>

次のように言われている。1人の拝火教徒が海に落ちて叫び声をあげ、言った。「おお、ファールスの火よ。(p.76) アゼルバイジャンの火よ。我が〔助けを求める〕叫びに応えられよ。」

船乗りは言った。「なんと愚かなことよ。おまえが落ちているこの水に、もし火が飛び込んできたとしたら、その火はおまえよりも悲惨な状況になってしまうじゃないか。だったら火を創ったお方を呼ぶんだな。火からは何〔の助け〕も得られやしないのだから。」

火が何かを燃やすときは、神の命令によって燃やす。火は、日陰でさえ乾く水苔や、火トカゲ(samandar)<sup>13)</sup> や白コショウ<sup>14)</sup> を〔自ら〕燃やすことはできない。水苔など、ひ弱なものだが、神の命令がなければ、火はそれに対して無力である。

アンダルスには薪のように燃える石がある、と言われている。しかし人がそこから灯火を採ろうとすると、火は鎮まり、燃え上がらない。

[ハッラタインの火について]

別の火は「ハッラタインの火(nār al-harratayn)」<sup>15)</sup>であり、アブス(‘Abs)<sup>16)</sup>の地方にある。〔それは〕夜に燃え上がり、昼は煙となった。数ファルサング離れても見え、炎が上がっているときはいつも、近づくものすべてを燃やしていた。拝火教徒たちは、その火に跪拝していた。やがて、創造主はイスマールの子孫であるハーリド・ブン・スィナーン(Ḥalīd b. Sinān)<sup>17)</sup>を遣わした。彼は穴を掘り、その火をそこに埋めてしまった。

ハーリドは世を去るとき、言った。「3日後、尾の短い野生のロバが私の墓の周りをまわる。そのロバを見たら、私の墓を掘り起こしなさい。復活の日までに生じることすべてをあなた方に教えよう。」

3日後、人々は集まった。尾の短いロバを見て、群集は2つに分かれた。一方の人々は「私たちは彼の墓を暴かない」と言った。ハーリドの息子はこのグループにいた。彼は、「そうだ。そうなれば私は〔墓を〕暴かれた者の息子と呼ばれるだろう」と言って、人々がハーリドの墓を掘り起こすことを許さなかった。

預言者〔ムハンマド〕——彼に平安あれ——が現れると、ハーリドの娘が連れてこられた。預言者——彼に平安あれ——は彼女を丁重に扱い、言った。「こちらは、彼の民が失った〔預言〕者の娘である。」

13) 火の中で生きると信じられていた動物。「サンショウウオ」の訳語があてられる場合もある。

14) 本書の第5部「樹木・香草の章」に、「白コショウは火の中で燃えることはない」(320頁)とある。

15) この「ハッラタインの火」とハーリド・ブン・スィナーンに関するまったく同様の記述が、ジャーヒズの『動物の書(Kitāb al-ḥayawān)』に見える[Abū ‘Uṣmān al-Jāhiz, *Kitāb al-ḥayawān*, Ed. ‘Abd al-Salām Muḥammad Ḥārūn, al-Majma‘ al-‘ilmī al-‘Arabī al-Islāmī, Beirut, 1969, vol.4, pp.476-477]。それによると、この火は「バヌー・アブスの地(bilād Banī ‘Abs)」にあったとされる。

16) 刊本は‘ANSだが、前注との関連から「アブス」と読む。本書には出てこない地名である。

17) ハーリドは、イスラームの伝承においては、イエスとムハンマドの間に現れ、イスマールの子孫から初めて出現した預言者とみなされる。アラブの間に広まっていた火への崇拜を批判し、ハッラタインの火を消したと言われている[EF: Khālid b. Sinān]。

私は、次のことのためにこの話を記した。火は驚くべき造物であり、創造主は人々の役に立つよう、また地獄の住人の罰となるよう〔火を〕お創りになった。その罰の中にさえこれらすべての有益さが（p.77）あるのだから、その慈悲にはどれほどの〔有益さ〕があらうか。次のように言われている。「輝き」とは「光」を指す語であり、「火」は「熱」を指す語である。どちらも上昇する物質である。「輝き」は単独で上昇し、上昇させられることはない。一方、「熱」と「燃焼」は「火」に属し、「輝き」には属さない<sup>18)</sup>。

拝火教徒の一部の者は、「火は神の娘であり、牛は天使である」と言い、〔自分の〕言っていることを恥じてはいない。

アブー・アル＝フザイル（Abū al-Hudayl）<sup>19)</sup> は次のように言っている。「神の被造物のなかで最も愚かな〔輩である〕1人の拝火教徒に会った。私は尋ねた。『火とは何か？』

彼は答えた。『神の娘だ。』

『牛とは何か？』と尋ねると、『神の天使だ』と答えた。

『水とは何か？』と尋ねると、『神の光だ』という。

『飢えや渇きとは何か？』と尋ねると、『貧しさだ』という。

『貧しさとは何か？』と尋ねると『ディーヴだ』と答えた。

『大地を支えているのは誰か？』と尋ねると、『バフマン（Bahman）という名の天使だ』と答えた。

〔そこで〕私は言った。『おまえたち拝火教徒は悪しき教えをもっていることよ。天使を殺し、神の光で洗い流し、神の娘で焼いてしまう。貧しき食事でもってシャイターンをつくり出す。あげくにバフマンという名の1人の天使の背中を用を足すとは。』

この話の真意は、火がたとえ気高き元素であるとしても、崇拜するには値しない、ということにある。

火について驚嘆すべきことは諸地域に数多くある<sup>20)</sup>。

サランディーブとベンガル（Bankālūs）の境域の間にあるヒンドの島々のうちの1つでは、船は水難の危険に満ちている。そのため矢を船の舳先に結びつけ、矢じりを上に向けておく。暴風が危ぶまれ、その矢じりに目を向けていると、大きな星のような火が現れる。そして〔その火が〕矢じりの先に止まると、沈没の危険がないというしるしである。ときには1晩に何度も現われる。

こういったことが言われている。アッラーは最もよく知りたもう。

〔次に〕天のさまざまな火について述べよう。至高なるアッラーが望みたもうならば。

18) このアラビア語はかなり省略されており文意の把握が難しいが、似たような文言がジャーヒズの『動物の書』に見られる。そこでは、ムッタズィラ派論者のアブー・イスハークの言として次のようにある。「火は熱と輝きについて言われる名である。しかし『[火は] 燃やし、熱する』と言われるとき、燃やすことと熱することは、これら共存する2つの一方、すなわち、輝きのない熱について言っている」にすぎず、「熱は上昇する実体（jawhar）であり、2つの実体は一致する面もあるが、こと上昇に関しては、両者は一致しない。（中略）輝きは単独では高いところがあり、高みに引き上げられることはない」[al-Jāhiz, *Kitāb al-hayawān*, vol.5, pp.5-6]。アラビア語の表現法が重なるので、典拠がジャーヒズの書であることは確実だが、著者トゥースイーの理解は若干異なっている。ただし、テキストの欠損の可能性もある。

19) テキストでは ABW AL-HDȲR とされているが、サーデギー本に従う。9世紀に活動した、ムッタズィラ派の初期の論者である [EF: Abū al-Hudayl al-'Allāf]。

20) この段落がここにあるのは文脈上そぐわない。サーデギー本ではこれ以降の1段落は、「マギたちの不幸」の前に置かれている。

### <稲妻、流星、雷鳴、雷光について>

至高なるアッラーのいわく、「かれは雷鳴を送られ、(p.78) これでかれの御好みの者を撃たれる」[Q13: 13]。[ペルシア語の] 意味は次のとおりである。「われこそは神である。われは火を遣わし、それによってわが望むものを撃つ。」

「稲妻 (ṣā'iqa)」は「火の層 (falak al-nār)」<sup>21)</sup> から現れる火であり、2つの蒸気<sup>22)</sup>の間から大地を目指してやってくる。もし空気が湿っていれば地上には届かないが、空気が澄んでいれば、地上に達し、達した先のものは何であれ破壊する。

ムハンマド・ブン・ジャリール・タバリー (Muḥammad b. Jarīr Ṭabarī)<sup>23)</sup> は言う。タバリストアーンで稲妻が王の宮殿に落ち、ドームを破壊し、多くの兵が死んだ。その後、真っ黒な雲が立ちのぼった。雲が晴れたときには、拝火殿は崩れ落ち、多くの木が燃え、拝火殿にいた人々 (harābiḍa) はみな死んでいた。

賢人たちが言うには、火(稲妻)が現れるのは早魃のしるしであり、水上の霧は疫病のしるしである。

### <「流れる」星について>

さて、「流れる星 (sitāra'ī ke kišīda)」は、星ではない。というのも、もし星が1つでも [地上に] 落ちたならば、世界中が燃え尽きてしまうであろう。そう、あれは乾燥した煙なのである。空気の熱がその中に入り、発火する。天はまわっているが、それもまた、天とともにまわっている。それが星 (kawḳib) ではないと思えないのは、近くにあるからである<sup>24)</sup>。だが、最も近い星は月である。月は10万ファルサング [のかなた] から見えているが、この星(流星)は100ファルサング以上離れた場合には生じず<sup>25)</sup>、すぐに落ちてくる。おそらく、相反する2つの蒸気がぶつかり、それらが互いに離れようとし、しばらく動き続ける。空気はその2つの蒸気の間に関じ込められる。やがて冷たい蒸気が、火を無理やり地上に投げ落とすのであろう<sup>26)</sup>。

21) アリストテレスは、自然な状態における物質の運動の原則から、土、水、空気、火の4つの元素は、宇宙の中心のまわりを同心円状に取り巻くと考えた。すなわち、宇宙の中心の周囲にはまず大地が存在し、それを水の層、空気の層、火の層が順に取り巻いている、というものである。このなかで火の層は大地から最も遠くに位置するが、それは月下界の下方にある、とされている [アリストテレス著、泉治典訳『気象論』アリストテレス全集5、岩波書店、1969年、3-5頁]。なお、本書第2部の議論は、一般的にアリストテレスの説にもとづいている。

22) 2つの蒸気に関して、アリストテレスは次のように述べている。「大地が太陽 [の運動] によって暖められたとき、そこから出る蒸発物は或る人々が考えるように一種類ではなく、むしろ二種類でなければならない。その一つはいっそう霧のようなもの、いま一つはいっそう風のようなものである」「蒸発物は二種類で、一つは湿ったもの、一つは乾いたものであり、両者の結合物 [空気] は可能的にこれら二つのものを含んでいる」[アリストテレス『気象論』(泉訳)、12-13、98頁]。

23) 『諸使徒と諸王の歴史 (Ta'riḥ al-rusul wa'l-mulūk)』や『クルアーン章句解釈に関する全解明 (Jāmi' al-bayān)』などを記した著名なウラマー (923年没)。タバリストアーンの都市アーモルで生まれ、レイを経てバグダード、シリア、エジプトへ学問探求の旅をおこなった [岩波イスラーム辞典：タバリー]。

24) ここの文意は把握し難い。ソトゥーデ本では、“be-dān na-tawān dānistan kī na kawḳib ast ke nazdīk ast”となっているが、同じ文章がサーデギー本では“be ān tawān dānistan”と肯定形になっている。後者の場合は、「それが星ではない、と知ることができるのは、近くにあるからである」といったところか。

25) アリストテレスは流星の生じる場所について、「それは天界では起こらず、むしろもっと下の場所 [月下界] で起こる」と述べている [アリストテレス『気象論』(泉訳)、12頁]。

26) アリストテレスは流星の発生について、(1) (諸星の) 運動によって燃やされたため、(2) 冷によって空気が凝結する際に、そこから熱が押し出されて分離するため、という2つの要因を挙げている。そして流星が下へ向かうのは「それら [流星] をおしだす濃厚なもの [冷によって凝結した空気] が下のほうを向いているから」であり ([ ] 内は引用者による補い)、さらに雷が下に落ちるのも同じ理由であると述べている [アリストテレス『気象論』(泉訳)、14頁]。

ヘラートの町のあるミナレットに「星が」落ち、3分の1の高さになってしまった。

またある人が荒野で眠っていると、鋭い稲妻が彼の足に落ち、脛が切り離されてしまった。だが彼の足からは1滴の血も流れず、火傷になっており、火傷の爛れた跡が残っているだけであった。

#### <雷光について>

「雷光 (barq)」もまた、石と鉄のように、雲と空気が互いにつかりあったものである。そこから音が生じると、それを「雷鳴 (ra'd)」と呼ぶ。人はまず雷光を目にし、つづいて雷鳴を耳にする。なぜなら視覚は聴覚よりも鋭敏だからである。たとえるなら、ある人が (p.79) 海岸で手を叩くと、別の人はその人が手を叩くのを目にした後、しばらくしてから手の音を耳にする。

タバリスターンの境域では空から火(雷)が落ちてくると、人々は落ちた場所にしるしをつけ、[そこを]掘りおこす。水脈に達すると、金や銀などの鉱物片の入った鉱石が見つかる。それは「空のインゴット (ḥišt-i āsmānī)」と呼ばれている。それは、[空からの]火によって大地の中で熔けた鉄や銅や金や銀といった地中の鉱物[の集合体]であり、水に達して固まったものである。

ところで、この火が水に落ちると、そこから轟くような音が生じる。その衝撃で人が死ぬこともある。

#### <雷鳴について>

知れ。「雷鳴」と「衝撃音 (hadda)」と「轟音 (wahī)」の間には次のような違いがある。火が下に落ちるとき、空気中に水蒸気があるとそこから音が生じ、それを「雷鳴」と呼ぶ。空気が澄んでいると、[火は]大地に向かい、海に落ちると水の音がする。これを「轟音」や「衝撃音」という。この音は恐ろしく、壊滅的である。また、陸に落ちると、それは「稲妻」と呼ばれ、[落ちたところのものを]破壊し、地中に突き刺さり、水脈にまで達する。

知れ。魚は雷鳴の音で死ぬ。[魚は]雷鳴や、雷鳴を呼び寄せる雲を恐れて海から顔を出すことができない。魚が[雷鳴によって]海の中で死ぬと、[死骸は]猛毒となり、海中の生きものはそれから逃げる。

#### <虹について>

さて、「虹 (qaws-i quzah)」は[ペルシア語で]「ティーラージェ (tīrāza)」と言う。太陽の環の光であり、それが空気中の湿った蒸気を取り入れたものである。たとえるなら、天のなかでも太陽に近いところにはより明るい部分がある。その周辺にはまた別の部分があり、その明るさは[先の部分]より少ない。3番目の部分はさらに光が少なくなる。雨の滴や水蒸気も、ときにこのような状態にある。太陽に最も近い部分は赤色に見え、2番目に近い部分は緑色に、3番目の部分は黒っぽく見える。

虹はいつも太陽の反対側にあり、完全な円環をしているが、半分は大地の下にある。空にかかる円の全体を見ることは誰にもできない。満月の夜、月が地平線に近いところにあり、雨が降ると、虹が生じることが多々ある。(p.80) もしそなたが[虹のでき方を]知りたいと思うならば、 TENT を張り、しっかりと覆い、その中に入り、太陽の光が差し込む程度の穴を開け、水を口に含み、光の差し込む方に吹きつけなさい。[そうすれば] その中に虹と同じような色が生じるだろう。澄んだ水を口に含み、太陽に背を向けて空気中に吹きつけると、自分の目の前に虹が見える。

虹というのは晴天のしるしである。

### <彗星について>

「彗星 (dū al-du'āba)」<sup>27)</sup> は、創造主がご自身の完全なるお力を示したものである。油脂を含む蒸気が大地から上昇し、火の物質に達すると、太陽の熱がその中に入り込み、火となる。それを「彗星」と言う。ときには長く、またときには円いものや三角形のものがあり、太陽のような色をしている。

マームーンの時代に、長く伸びた火がマルヴに現れ、何日間かとどまった。

タバリストーンでは長い星が東から現れた。幾晩かとどまり、その後フェルガーナ (Firgāna) の町に落ち、[町を] 破壊した。フェルガーナの王は死んだ。

空気中の蒸気 [から生じるもの] を、[太陽や月などの] 星そのものと区別して理解するには、ここではこのくらいで十分であろう。同様に、「夕焼け (šafaq)」と呼ばれる [空が] 赤い状態は、蒸気の中に入り込んだ太陽の環の光によるものであるが、火のように見える。

さて、空気の驚異について述べよう。

## [第2章：空気の驚異について]

### <空気と風の驚異とそのめぐみについて>

至高なるアッラーのいわく、「またわれは豊沃にする風を送った」[Q15: 22]、[すなわち、ペルシア語では]「われは、あるときは木々に実を結ばせ、[またあるときは] 船を走らせるものとして風を創造した」とおっしゃった。

世界中に風 (bād) はある。創造主は、海のように、天のくぼみに囲まれたものとして空気 (hawā) をお創りになった<sup>28)</sup>。また、水を魚の命の綱とされたように、空気を陸に住まう者の命の綱とされた。アードムの子孫の滋養物は、パン、水、空気の3つである。パンと水は肉体 (ajsām) の滋養物であり、空気は靈魂 (arwāh) の滋養物である。何となれば、人は、1日水やパンを食べなくても死にはしないが、もし一瞬でも空気が喉を通らなければ、死んで命を失ってしまう。

### <問答>

もし、「空気は水中の魚の喉へどのように届くのか」と問われたなら、「空気は (p.81) 水を介して魚に届く」と答えよう。すなわち、空気は水を囲み、水は魚を囲んでいる。もし、空気が届かないような水の中に魚が入るならば、[魚は] 死ぬ。たとえるなら、母親のお腹の中にいる子供のようである。たとえ空気が子供に [直接] 届いていないとしても、母親には届いている。無知な者が魚を見つめ、「[魚は] なぜ水の中で死なないのか」と言うならば、魚のほうは、「この人間はなぜ空気の中で死なないのだろうか」と言うであろう。

人間が空気の中で死なず、水の中で溺れてしまうように、魚は空気の中で死に、水の中では溺れ

27) アラビア語は「おさげ髪 (ふさ) をもつもの」の意。

28) ペルシア語の「風 (bād)」とアラビア語の「空気 (hawā)」はほぼ同義として使われている。おそらくはペルシア語においても「空気」を表すものとして“hawā”の語が定着し、独自の言葉を編み出さなかったからであろう。ただし、厳密な意味での両者の違いについては後述される。

ないのである。これは、比類なき強力者にしてすべてを知るお方のお定めになったことである。

### <空気の力について>

知れ。空気に備わる征服力や力は、いかなる被造物にもない。また、空気が持つほどの支配力は、いかなる元素にもない。もし誰かが天に行くならば、すべてが空気であるのを目にするだろう。見るがよい。1艘の船の中にある空気の重さは、1ミスカールにも満たないが、10万マンをもち上げる。革袋を空気で満たし、水に浮かべて、その上に山を置くならば、[革袋は]山をもち上げるだろう。ただし、革袋には穴が1つもなく、風を通さないものとする。この革袋を風でいっぱいにしてから[重さを]量り、その後、風を外に出してから量るとしても、その目方は少しも減りはしない。

### [[風（空気）の層]について]

知れ。賢人たちが言うには、天の近くには「微風（nasīm）」という名の層がある。その本質は、世界中に散った空気であり、靈魂の材料である<sup>29)</sup>。

太陽が窓という窓に差し込んでいるときに窓が閉められると、太陽が輝いていながら、日光は入ってこない。同様に動物の喉もまた、もし絞められると、空気がありながらにして息ができなくなる。

### <問答>

「喉を絞められても、なぜ魂（jān）はすぐに失われぬのか」と問われれば、こう答えよう。なぜなら魂は、体のすべての部分に潜在しているからである。どの毛髪の下にも、(p.82) 体の各部分から別の部分へと向かう息の通り道（majrā-yi nafas）がある。そうでなければ、喉を絞められたらすぐに死んでしまっているであろう。だが[実際には]、毛穴が閉まり、[体が]冷たくなり、そこを通過して空気が出てこなくなる程度のあいだは持ちこたえる。そのあとに、息が絶える。

### <問答>

「火の力と空気の力は、どちらが強いのか」と問われれば、「空気の力である」と答えよう。というのも、金属片がどれほど長く火の中に置かれたとしても、風がふいごや炉に吹きつけられない限り、熔けることはないからである。すなわち、空気が火を金属片の各部分に伝え、ようやく[火は金属片を]熔解させる。

知れ。創造主——至大なれ、崇高なれ——は、空気と火を両方一緒にお創りになった。同様に、水と土と一緒に創造された。空気は全世界を覆っている。月天は回転するが、その運行速度によって空気は熱せられ、火が生じる。それゆえ、[火は]空気のそばやまわりに現れるのである。空気は、[天の]両極に近づくほどに、量（密度）が少なくなる。

知れ。大地から月天の際まで、すべてが空気の領域である。大地から月天までの距離は、3万5213ファルサングである。

29) 紀元前6世紀のアナクシメネスは、「空気である私たちの魂が私たちをしっかりと掌握しているのと同じように、氣息と空気が自然万物全体を包み囲んでいる」という言葉を残している。アナクシメネスは、空気こそがアルケーン（万物の根源）である、と考えた[廣川洋一「ソクラテス以前における自然概念」『古代の自然観』上智大学中世思想研究所編、創文社、1989年、3-23頁]。

【空気が一様であることについて】

知れ。空気は総じて一様である。それは水や火がすべて一様であるのと同様であり、部分ごとに異なることはない。

<問答>

もし、「なぜある水は苦く、別の水は甘いのか。また澄んだ空気や淀んだ空気があるのか」と問われるならば、次のように答えよう。

水や空気はその本質において変化するのではない。それは火が変化しないのと同じである。しかし、ザンジバル (Zangbār) の境域にある空気は、地面近くでは黒さを与え、スラヴ (ṣaqāliba) の境域にある空気は白さを与える。ホラーサーンにやってきたアラブ人は、本性から変わってしまう。荒野にいるイナゴは土色をしているが、庭園にいと緑色である。また、若者の頭にいるカミツキ虫 (gazanda) は黒いが、老人の頭にいるものは白い。明らかなことだが、(p.83) エチオピア人 (ḥabaṣiyān) の顔は、テュルク人の顔ほど良くはない。マイサーン (Maysān)<sup>30)</sup> のナバティア人 (nabat)<sup>31)</sup> の境域にいる男たちには、ワニのような尻尾がある。もし船乗りがナバティア人を見たら、その顔を類人猿 (būzīna) の顔だと思うだろう。マグリブの境域には、腐った水や土や空気のために変異した人々がいるが、無知ゆえにそこから移動しようとはせず、時を経るにつれ、彼らの毛は伸び、尻尾は長くなる。また、北方の風洞 (mahabb) では人が類人猿になる。もし知りたと思うなら、ザンジバル人とキブチャーク人 (qifcāq) の顔を見るがよい。そしてエチオピア人とテュルク人の体を見比べよ。そうすれば空気や土の影響がどれほどわかるであろう。

<問答>

もし、「変異 (mash) は認められているか」と問われれば、「認められている」と答えよう。至高なるお方のお言葉に「サルまたはブタとされた者」[Q5: 60] とあるように。創造主は、「醜いものへの」変異や高貴なものへの変身 (taqlīb-i a'yyān) において全能であられる。

一部の者は、「変異」や「[大地の] 陥没 (ḥasf)」はあり得るが、「石が降ること (qadḥ)」は、石が天から降ってくることはないという理由からあり得ないと言う。しかし創造主のお力においては、変異も石降りも陥没も起こりうるのである。それぞれについては見合った章の中で説明しよう。

さて、創造主は、どのような場所でも影響し得るような力を空気の中にお創りになった。火には可燃性を創造し、水には可湿性を創造されたのと同様である。

知れ。ときに偶然の理由から、空気には変化が生じる。たとえばヒッポクラテス (Buqrāt)<sup>32)</sup> は次のように述べている。

海岸で疫病が発生したが、水中や空気中にはいかなる原因も見られなかった。調査の結果、[次のようなことがわかった。岸から] 20 ファルサングのところで、雲が1匹の海竜 (tinnīn) を海中

30) イラク地方の南東部、ティグリス下流域をさす [EF: Maysān]。

31) ナバティア人には、アラビア半島北部に居住していたアラブ系の人々と、メソポタミア地方に居住していたアラム系の人々の2集団があり、アラブ人は両者を区別していた。前者は「シリアのナバティア人 (Nabat al-Sām)」、後者は「イラクのナバティア人 (Nabat al-'Irāq)」と呼ばれる。ここで触れられているナバティア人は後者であろう [EF: Nabat]。

32) 紀元前4-5世紀のギリシアの医師。古代から名医の代名詞であった。イスラーム時代においては、医学のみならず、錬金術、天文学、魔術に通じた人物とされ、彼に帰されるアラビア語作品は数多い [EF: Bukrāt]。ただし、以下の話は彼のギリシア語の著作からは見つからず、典拠は不明である。

から引っ張り出し、海岸に放り投げた。[その竜] 腐敗し、そのため空気が腐り、動物たちが死んでしまったのである。そこで、大量の塩を竜に撒くよう命じられた。ようやく腐敗が収まり、空気が清浄になり、疫病は鎮まった。

ゆえに、空気そのものが変化するのではなく、空気はどこでも一樣なのである。

#### <風と風の吹く場所について>

知れ。風には多く [の種類が] あるが、すべて空気の運動であり、波となって揺れる海水のように、何らかの理由で動く。空気の運動原因は、(p.84) 多くが蒸気の押しだす力であり、それは空気をある場所から別の場所へと動かす。その結果、密度の濃い場所ができる。すべての場所 [の密度] が等しくなると、[動きは] 収まる。[それは] 水上のガラス瓶のようなものであり、その中に息を吹き込むと、瓶の中に入っていき空気の量に応じて、水が外へ流れ出す。

空気の運動は偉大な物質運動のひとつであると言えよう。たとえば大軍が出陣すると、空気が振動し、戦闘や軍の混乱の際には、風が生じる。同様に、惑星の回帰 (rujū‘)、とりわけ水星の回帰時には、その運行によって空気が振動する。

知れ。空気は、静まっている間は「空気 (hawā)」と呼び、動いていると「風 (riyāh)」と呼ぶ。風は、帝王のような物質である。その始まりも終わりも中心も明らかではなく、その姿や実体を見ることはできない。[風は] すべての物質を凌駕し、あらゆる鉱脈の中に怖気づくことなく堂々と入り込んでいく。ときには天使のように穏やかで、ときにはディーヴのように荒々しい。火と協同するが、火の中に入っても燃えあがらず、クルズムの海 (紅海) に注いでも湿らない。世界中を覆いつつ、世界の真ん中に居座る。それにとっては東も西も天も地も同じである。庭の守りをし、木々を実らせる。あらゆる動物の生命の源である。

#### <風の種類について>

知れ。風にはいくつかの種類があり、その方位によって区別されている。空気が東の方で動く場合は「東風 (ṣabā)」と呼んでいる。西方の場合は「西風 (dabūr)」と呼び、北方であれば、「北風 (shamāl)」、南方で動けば「南風 (janūb)」と呼んでいる。しかし、空気の本質は [異なることなく] 1つであり、1つの元素である。

#### <雲とその性質と益について>

至高なるアッラーのいわく、「(雨を含む) 重い雲を起こさせられる」[Q13: 12]。[すなわちペルシア語では] 創造主は、「われは重い雲をあつめ、そこから滴となった雨を世界中に降らせる。建物が壊れない程度に」とおっしゃっている。

知れ。雲は蒸気であり、海から立ちのぼって上方へ (p.85) 行き、集積し、冷気がそこに達すると、滴となり、[雨となって] 降る。その蒸気の成分が増える限りは降り続け、やがて止む。[その際] 太陽やあるいは別の星々がそれを分散させる。また、蒸気が空気の中で冷えると、雪となって降り、空気が荒れると、雪を雹に変える。蒸気が少ないと雨にはならないが、霧や霧となる。明け方、煙がかかっているのを見たとしても、太陽が昇ると霧散したり、強風によって消滅したりする。これらはすべて創造主の無限のお力によるのである。

[トゥルキスターンのまじない]

トゥルキスターンの境域や寒冷地帯には不思議な雲があるらしい。人々はそれを「つくりだす」呪文を持っている。かの地の僧侶たち(ruhbānān)は雲や寒さを起こす呪文を唱える。

ホラーサーンのアミール、イスマーイール・ブン・アフマド(Ismā'il b. Aḥmad)<sup>33)</sup>は言う。「私は2万の兵を率いてテュルクに対する聖戦に赴いた。ある日、私の軍の中から喚き声があがった。彼らが言うには、テュルク人たちには、寒さをつくりだして人々を殺すことができる呪い師がいる、というのだ。多くの者がそれを目撃していたが私は信じなかった。翌日、山の上から真っ黒な雲が立ちのぼった。恐ろしい姿で大きな音を立て、炎の舌を「四方に」伸ばしていた。私の軍は怖れた。私は「馬を」下り、顔を地面につけて言った。『アッラーよ、我らの敵に勝利をお与えになりませぬように。イスラームの民を恥辱へと貶められませぬように。』

しばらくすると、不信心者の軍勢が敗走したという報せが届いた。当の冷氣「の雲」が彼らにはね返り、何人かがそれで命を落としたのだ。我々は大量の戦利品を手し、引き上げた。」

トゥルキスターンの冷氣と雨乞いはよく知られている<sup>34)</sup>。

知れ。雲や冷氣を創り出すことは人間にはできない。しかし、人が何かのことに一心になり、創造主がそれを聞き届けられるとしても驚くことではない。あるいは天命が彼に味方し、あるいはその地域では雲や冷氣が頻繁に生じ、僧侶たちはそれらが起きる時間を知っており、頃合いを見て呪文を唱え、「我々がつくりだしたのだ」と見せびらかしている、という可能性もあろう。(p.86) いかなる場合であっても、創造主の定めなしに「それらが」現れることはない。

知れ。創造主は雲の中に、ものを引き寄せる力をお創りになった。たとえば海から竜を引っ張り出し、荒野に放り出す。海竜は海の底にいるが、雲を恐れて頭をもたげることができない。雲は、鉄を引き寄せる磁石に似ている。雲はこの海竜の頭を引き寄せるのである。

[海竜について]

アムル・アル＝バカーイー(‘Amr al-Bakāyī)<sup>35)</sup>は次のように言っている。「海竜は御しがたい竜「の一種」であり、「陸では」蛇を喰らい、やがて海に入り、魚を喰らって大きくなる。その尾は1ファルサングにも達する。海の生きものたちは、神——至大なれ、崇高なれ——に海竜の災いを訴える。すると創造主は雲を1つ遣わす。「雲は」海竜を引き込み、ゴグとマゴグ(Ya'jūj wa Ma'jūj)の地に放り投げ、彼らの餌にするのだ。」

中国には、小さな石があり、それらを互いに打ち合わせると風が起こり、冷氣が生じ、雪が降る。チベット(Tabbar)にはある山があり、もしそこで誰かが大きな音を立てると、洪水を引き起こすほどの大雨が降る。人々は馬の蹄にフェルトをまきつけ、そこをわたる。

33) サーマーン朝第2代君主(在位892-907年)。同朝初代君主である兄ナスルの下で、プハーラーの支配者として活動した。中央アジア平原部のトルコ人に対して遠征したほか、バルフ周辺の地域を巡ってサッフール朝のアムル・ブン・ライスと争った[EP: Ismā'il b. Aḥmad]。

34) トルコ系諸部族のあいだに広まっていたとされるジャダの呪法のことだろう。これについては、羽田明「ジャダの呪術について」『中央アジア史研究』(臨川書店、1982年、405-413頁)を参照のこと。

35) この人物や逸話の詳細は不明である。サーデギー本では、‘Amr Bakāli となっている。

<逸話>

ムアッラー・ブン・ヒラルル (Mu'allā b. Hilāl)<sup>36)</sup> は言う。「マッシーサ (Maṣṣīṣa)<sup>37)</sup> にいたとき、海が荒れ、そこから煙が立ちのぼった。つづいて雲が現れ、海の中に入っていった。その〔雲の〕あとから〔別の〕黒い雲が現れ、ついには7つの雲が海に入っていった。それから〔雲は〕上昇し、何かを引っ張り上げた。その頭は天に達し、尾は水中にあった。」

[逸話]

アンティオキア (Antākiya) の海で、1匹〔の海竜〕が引っ張り上げられた。その尾が城壁にあたり、40もの塔が崩れ落ちた<sup>38)</sup>。

海竜は鱗のある生きもので、御しがたく、大きな翼と長い2つの耳を持つ。その頭は山のように大きい。雲が海竜を引きずり出すときは、(p.87) その地方の人々は、彼らの頭上に落ちてこないよう懇願する。雲はそれを引っ張り、荒地地に放り出す。もし町の上に落ちると、その町は壊滅してしまう。

雲の驚異については以上のようなことが言われている。

〔この〕世界は清浄で空っぽだったため、創造主は、「『有れ』と仰せになれば、すなわち有る」にもとづき、世界を雲で満たし、すべての地平を覆い隠された。そしてお望みのときには、一瞬にして無きものとされるのである。

〔雲が〕動くときは、いつも1片ずつ西から東へと流れていく。アッラーは、我々が語るもろもろの驚異や秘密について、最もよく知りたまう。

36) 初期のハディース伝承者であるが、後世、「信用できない」「嘘つき」とみなされた人物。

37) キリキア地方のジャイハーン川沿いにある町。ウマイヤ朝期にイスラーム勢力が征服したが、10世紀にはビザンツ帝国に再征服され、さらに小アルメニア王国の支配下に入った [EP: al-Maṣṣīṣa]。

38) ジャーヒズは、アンティオキアにおける海竜の目撃譚を記録している [al-Jāhīz, *Kitāb al-ḥayawān*, vol.4, p.154]。